

日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 48 号

<目次>

巻頭言	・・・1
特集 台湾の音、台湾の匂い	・・・2
学会活動報告	・・・16

巻 頭 言

変わりゆく「世界」の中で

日本台湾学会理事長 北波道子

2025 年になりました。私の不慣れな理事長の任期も、もうすぐおわりです。常任理事および様々な周りの皆様のお蔭をもちまして、大過なく責務を終えることができました。お一人お一人のお名前は申し上げませんが、本当にありがとうございました。2 年前の就任時の目標が、日本台湾学会をその機能や活発な活動状況のままに次期に引き継いでいくこと、であったと思えば返しますと、何とか役割を全うできたと、ほっとしています。

「志が低い」？——かもしれません。とはいえ、21 世紀、とりわけ 10 年代あるいはコロナ禍以降の急速なデジタル化の進展とそうしたサイバー空間までへの市場経済の浸透が、人々の生活様式や価値観、それに伴う行動様式を大きく変えつつあることを感じます。そんな中でも、日本台湾学会が旺盛な活力を保ち、その成果が第 25 回、第 26 回の学術大会および機関誌『日本台湾学会報』25 号、26 号に結実してきたことは、大変喜ばしいことです。また、第 13 回学会賞、第 2 回学術賞が選考されたことなども、互いに切磋琢磨し、議論する場としての学会の存在意義をますます重要なものに行っていると思います。

さて、今号の特集は「台湾の音、台湾の匂い」と聞きました。個人的に、すぐに浮かんでくるのは、音でいうと、員林に住んでいたころ、夕方によく聞いた「碗粿」売りのおじさんの声です。「ワーゴェッ！ワーゴェッ！」と、台湾の街はいつもとても賑やかだったと記憶しているのですが、なぜか、行きかうバイクの音が途切れたつかの間の静けさの中でよく響く声が聞こえてきた気がするのです。懐かしいです。また、匂いでいうとやはり、初めて台湾に行ったときに衝撃を受けた、コンビニの茶葉蛋ですね。一度食べると、すぐに大好きになりましたが、強烈な八角の匂いに驚いたことは今も忘れません。聴覚と嗅覚による記憶は、自身が慣れ親しんで育ってきた日本と似て非なる台湾のユニークな特徴を私の脳内に深く刻んでいるように思います。ところが、慣れていくにしたがって、こうした音や匂いの存在を感じなくなっていったことに気が付きました。先ほど、茶葉蛋ってまだコンビニで売ってたっけ？と web 検索して確認したくらいです。

台湾経済の研究を始めてから、もっとしっかりと当時の台湾を見て、感じておくべきだったと改めて思うようになりました。「アジア NIEs の優等生」と称された台湾です。第二次世界大戦後に日本に次いで高度成長を果たしたといわれる新興工業化経済群はアジアモデルの好例として世界中から注目されるようになりました。今ここで実証はできませんが、20 世紀、特に 1990 年代初頭くらいまでは、日本人の多くは、アジアの新興国は、皆、いずれ「日本のような先進国」になることを目指していると考えていたのではないかと思います。私自身も、工業化や金融のグローバル化は画一的な技術の進歩やマネジメントの方法を要求するため、様々な企業が国の違いや成り立ちとは関係なく、共通のゴールを目指すというイメージで、東アジアの経済発展を理解しようとしていた部分がありました。しかし、今はともに先進国型の発展後の社会を形成している日本と台湾も全く同じではありません。むしろ、現在になってますます、日本と比較してますます、台湾の企業と経済、社会の特殊性が際立ってきた感があります。

というわけで、今後しばらくは「日本モデル」と「台湾モデル」についてもう少し深く研究していきたいと考えています。地域研究の醍醐味である普遍性と特殊性の座標をしっかりと描くためにも、その軸をもっとしっかりさせなければならない、などと決意を新たにする今日の頃です。

今度台湾に行ったら、まず碗粿と茶葉蛋を食べようと思います。

特 集

台湾の音、台湾の匂い

高雄で奏でる南管の音——東宮行啓の遠望——

春山明哲（早稲田大学）

台湾の音、台湾の匂い、というテーマで特集を組む、という企画をいただいて、「音」というのは面白いなと思い、以前書いてお蔵入りになったエッセイがあるので、それをネタにしよう

うとお引き受けしたが、読み直してみるとピンと来ない。そうこうしているうちに、はっと想い出した情景があったのである。

1974（昭和49）年3月、はじめて台湾に行ったときのことである。高雄出身の父に連れられての海外旅行であるから、父にとっては里帰りであるが、私にとっては日本国の旅券による初めての外国訪問であった。台北の親戚、従兄弟姉妹への挨拶を済ませて、特急で（新幹線はまだない）高雄に向かった。父の実家は高雄市左営区廊後というところにあり、当時、父の父、祖父（アンコン）は健在であった。祖父の趣味は音楽だそうで、それも「南管」という伝統的民間音楽の演奏を仲間と集まって楽しむことが大好きだという。

父の実家の住宅はこれも伝統建築の四合院とかいう様式だそうで、その入り口から入ってすぐ左の部屋に、三々五々祖父の南管友達が集まってきた。7、8人が円環となって演奏を始めた。尺八とか、琵琶に似た楽器もある、器楽演奏である。好奇心にかられて見ていたら、しばらくして、祖父がお前もやってみろ、という。カスタネットに似た木製のものを渡されて、リズムを取るだけの単純なものである。ちょっと練習してすぐ本番である。見よう見真似とはこのことか、と思いながら、カタカタやってすぐおしまいとなった。祖父が、お前はなかなか筋がいい、という、お仲間もそうだそうだと笑いながら相槌をうつ。すっかり気をよくし、初めての台湾は楽しいの一語につきる旅となった。

それからこのことはすっかり忘れていたのだが、確か、いところがアンコンについて書いていたな、ということのを思い出し、彼の「父の思い出」（私にとっては伯父さん）を引っ張りだしてみたら、こんなことが書いてある。

「左営区廊後には「南管」と呼ばれる古楽を演奏するアマチュア団体があり、（略）この祖父の属した団体の自慢は「御前演奏」をしたこと。昭和天皇が大正天皇の摂政だった時の話だと思う。今でも「御前演奏記念」の錦の御旗を掲げて演奏する。」

そうだったか、東宮行啓といえば、若林正丈さんの「1923年東宮台湾行啓と「内地延長主義」」（『台湾抗日運動史研究』所収）である。「皇太子日程、訪問個所、行事一覧」の表を見ると、4月21日から22日まで高雄でのイベントが出ているが、「御前演奏」らしきものはない。

もうひとつ思い出したのが、檜山幸夫さんが所長をつとめていた（当時）、中京大学社会科学研究所の『台湾行啓記録』である。東山京子さんの解説「裕仁皇太子の『台湾行啓』記録について」をまず読んでみた。宮内省版と台湾総督府版の比較を含む詳細な解説であり、これで見ると「高雄州庁、高雄第一尋常高等小学校、高雄市内の小公学校および中学校での皇太子の様子を顔色から立ち居振る舞いまでを詳細に描いている」（同書451頁）とあるのだが、本文には収録されていない。残念ながらそもそも宮内省版は記録の全体ではないのである。国立台湾図書館にある台湾総督府版の調査が必要である。

ところで、祖父とその仲間達の演奏した南管とはどんな音楽なのか。私が試みたあの楽器はなんというのだろうか。これまたやっと思い出したのが、楊桂香さんの『台湾の南管－南管音楽における演劇性と音楽集団』（白帝社、2004年）という本である。楊さんが台湾大学とお茶の水女子大学での研究成果をまとめたもので、南管で使われる楽器の説明がある（20～21頁）。木製の楽器というと拍板、木魚、四宝などがあるとのことだが、図がないのと、考えて見ると50年も昔の「演奏風景」であり、楽器もわからないのは当然である。

しかし、こうしていくつかの文献をたよりに往事を思い起していると、高雄で奏でる南管の音を聞く心地がするばかりでなく、東宮行啓の遠望のなかに今は亡きアンコンとその仲間達の楽しい合奏が聞こえてくるような気がするの不思議である。

雨の匂いがする台北——歴史の天使の都市

山口守（日本大学）

どこの町にも特有な匂いがあるとよく言われるが、とりわけ海外の都市を訪れた時にそれをはっきり感じる人が多いのは、匂いが生じる元になる人々の暮らし方が、それまでの自分の生活と大きく異なるからだだろう。記憶をたどってみると、例えば1979年3月初めて上海の町に足を踏み入れた時は練炭の匂いが鼻を突いた。高層ビルが林立する現在の上海から想像もつかないだろうが、旧租界の古い西洋建築や旧ソ連風のアパートを除けば、上海の普通の人々の暮らしは弄堂と呼ばれる横町にあった。かつて一大家族が住むことが想定されていた民国時代の住宅が、社会主義体制下で複数家族の居住空間へと変化したため、その頃は台所が共用であったり、路地に直接練炭コンロを出して調理することが多かったせいだろう、街中が練炭の匂いに包まれ、それに調理している料理の匂いが混じって、異文化でありながら、どこか懐かしい空気を吸う思いがした。二年間の上海生活を終えて帰国した時、今度は逆に成田空港に醤油のような匂いが漂っている感じがした。1995年にサンフランシスコを訪れた時はワックスと洗剤の匂いが、ツーソンでは砂の匂いが、1996年アムステルダムでは海の匂いがした。

1985年8月初めて台北を訪れた時は、真夏だったせいか、匂いというより熱気が鼻の穴に入り込んでくる気がした。その後十数年は、年末や春先に台北を訪れることが多かったためか、いつも雨が降っている印象が強く、台北と言えば雨の匂いがすぐ浮かぶ。雨自体に匂いはないはずなので、雨に付帯する、もしくは起因する匂いと言った方が正確だろう。実際には台北駅近くのYMCAに宿泊することが多かったので、補習班通いの学生向けの食べ物から発する、八角のような香辛料と臭豆腐が入り混じった独特の匂いを嗅ぐことが多かったはずなのに、記憶の中の台北はいつも雨の匂いがしていた。それは現実にもそうであったというより、心情によるものだという気がする。台北にそぼ降る雨は、私にとって歴史認識と分かちがたく結びついているからである。そもそも私は大学院時代にアナキスト作家巴金のような民国時期の作家を研究していたので、上海にいた時は小説や資料を繁体字で読み、論文を簡体字で読むことになったが、当時の上海の町は当然ながら簡体字文化一色で、書店街の福州路でも簡体字しか目に入らなかった。いわば視覚的に中華民国は過去の歴史の中にしかなかったのである。それが1985年初めて訪れた台北は繁体字文化そのものの町だったので、奇妙な既視感を覚えた。それは小説の中でしか想像できなかった中華民国、つまり大陸中国で過去になった中華民国の現在に台北で出会った思いと言えるだろう。その民国発見の感覚が雨に結びついているのは、その後の台湾社会認識に関係している。

まだ戒厳令が解除されていない当時の台湾で、主として党外運動及びその周辺の人々を通じて台湾社会を知る機会が多かったが、時々誘われる秘密の学習会は、白昼の政治的監視を避けるかのように、たいてい夜に行われた。しかもなぜかいつも雨が降っていて、降りしきる雨の中を出かけた思い出が多い。いまでも「雨夜花」を聞くと、当時のその歌の持つ社会的意味を含めて、その頃の思い出が蘇る。謝雪紅の親族と会ったり、労働運動の活動家と議論したり、台湾独立運動の関係者に紹介してもらったりしたもの、たいてい雨の降る夜だったように記憶している。それが理由か、雨の匂いが台北の記憶に刷り込まれ、またその雨が激動の台湾現代史と感覚的に結びついているのである。そうした学習や認識を通じて、原住民族、漢族移民、日本植民地統治、国民党独裁政治、民主化運動が歴史的に連続する台湾を知り、深く興味を惹かれ、台湾文学研究に携わるようになった。

こうした経緯もあって、私にとって台湾は、現在から切り離された過去の事項の集積する歴史書の中に存在するのではなく、眼前で歴史が脈動している場所そのものである。私にとって雨の匂いが喚起する台北イメージは、ベンヤミンが言う「強風は天使を、かれが背中を向けている未来のほうへ、不可抗的に運んでゆく」、まさに歴史の天使の都市である。

山、海、原住民、音

魚住悦子（日本台湾学会）

心にどんな音が残っているだろうか。

はじめて出会った台湾原住民族はサオ族だった。その時に聞いた「杵音（きねおと）」は今も鮮明に記憶している。1999年9月9日、埔里に霧社事件研究者の鄧相揚氏を訪ねた。翌日がサオ族の正月ということで、日月潭湖畔のサオ族の部落に案内され、そこで「杵音」を聞いたのだ。中国語では「舂石音」と表現するが、「（杵で）石を舂く（つく）音」である。部落の頭人の家の庭に埋め込まれた平たい大きな石を、女性たちが囲んで杵でつく。杵は長さや材質が異なるのでそれぞれ音色がちがい、硬質な音がリズムカルに響く。これはサオ族が新年を迎えるための重要な行事である。この杵音は大変有名で、日本統治時代から観光客のために演じられてきた。佐藤春夫も1920年にこの地を訪れて杵音を聞き、「旅びと」にその見聞を綴っている。

翌日、霧社の春陽村（旧ホーゴ社跡）を訪ね、口琴をはじめて聞いたことも忘れられない。演奏してくれた口琴は金属弁が一枚のものだったが、二枚以上の金属弁をもつ口琴もある。どのような音色なのか、ぜひ聞いてみたい。弁と一体型の竹製の口琴もある。映画「セデック・バレイ」では口琴が力強い響きを放ち、印象的だった。

笛は珍しくもない楽器だが、双管の鼻笛は現在ではパイワン族にしか見られない。2012年4月に天理大学で開かれた「台湾原住民族の音楽と文化」国際学術シンポジウムの音楽会で、パイワン族のサウニャウ・チュヴリュヴリュさんが双管の鼻笛と双管の口で吹く笛の演奏を披露した。双管の鼻笛は、伝統的には、高い地位にある男性や一定の功を立てた勇士のみが吹奏を許されている。女性であるサウニャウさんにはその資格がないが、この伝統的な楽器の存続を強く願って、鼻笛の師匠に弟子入りを許されたとのことだった。彼女は笛をはじめとする楽器が「人々の生活にとけこんでおり」、「人と人の心や感情をつなぐものであり、さらには純真さやその思いを伝えるものでもあり、精神と感情の重要なポイントとなっている」と述べている（藤田・下村訳「原住民器楽と楽器」、下村作次郎ほか編『台湾原住民族の音楽と文化』、草風館、2013年）。パイワン族の男性は笛を吹いて女性に求愛し、また、亡くなった人を悼んで奏することもあり、人類学者の胡台麗らが研究や映像を残している。プユマ族の作家パタイは『暗礁』（魚住訳、草風館、2018年）に笛が奏でられる場面をいくつか描いているが、クスクス社に避難してきた琉球人をもてなそうと奏された笛の音の描写は圧巻である。

台湾原住民族と音楽というと、まず歌唱が思い浮かぶかと思う。かつてはプユマ族の張恵妹やブヌン族ユニットの動力火車が一世代を風靡した。パイワン族の血をひく蔡英文が台湾総統に就任してからは、式典で原住民の歌が披露されることが多かった。最近は原住民ミュージシャンがしばしば来日して東京や大阪でライブを行なっている。昨年公開された映画「流麻溝15

号」では政治思想犯のタイヤル女性が歌うタイヤル語の歌「Blak knyanyux mu（わたしは元気に暮らしています）」が流れた。

原住民やその関係者と集うと、必ず歌になる。原住民が日本語で作った歌もある。部落の共同作業を歌ったプユマ族ピナスキ部落の「草刈りの歌」などである。また、ご高齢の方々とは「夕焼け小焼け」など日本の童謡を歌うことも多い。

日本統治時代に台南師範学校で学んだツォウ族のウォグ・ヤタウユガナ（高一生）とプユマ族のバリワクス（陸森宝）は、曲を作って日本語で作詞し、戦後は民族のことで作詞して、多くの歌を残した。バリワクスの「美しき稲穂」は原住民運動のなかで歌われ、陳建年や胡徳夫らがそれぞれのスタイルで歌い継いでいる。

さまざまな曲が心によみがえる。

はじめて蘭嶼を訪れた 2003 年秋のこと、3 時過ぎには台東行きの最終便が飛び、島に静けさが戻った。その静寂も心に深く残っている。

このような音がわたしの心に残る台湾の音である。

卑南族のくしゃみ・あくび・耳鳴り、そして…

蛸島直（愛知学院大学）

人間は、くしゃみやあくびなど、生理現象としてさまざまな音を発するが、それらの解釈や対応には文化差が認められる。日本では、「一に褒められ、二に憎まれ、三に惚れられ」などと言われる「くしゃみ」であるが、卑南族（ピヌユマヤン・プユマ）の間では、回数を問わず悪しき予兆として忌まれている。帰宅後や就寝前などはさほど気にしないようだが、仕事に出かける際、誰かがくしゃみを発すると、必ず戻って出直すものとされてきた。このパリンシ（禁忌）を破ると、途中で蛇に咬まれるなど悪いことが起こると言われている。くしゃみが特に忌まれるのは、儀礼の場面である。同じ農作業でも、粟の刈り取り直前のくしゃみが厳禁とされるのは、粟が神聖視され儀礼性を帯びるからである。

卑南族の村で住み込み調査を開始して間もなく、収穫祭の開始を告げる重要な儀礼に向かう頭目に同行しようとしたとき、私は頭目の母親から「プナイン（くしゃみ）をするな」と注意を受けた。そうはいっても、突然の生理現象を抑えるのはむずかしく、儀礼の観察に際してはつねに緊張を強いられる。年 2 回の収穫祭は、夏は粟、冬は稲を祖先に献じるデミラツ儀礼によって開始されるが、儀礼の場は、カルマハンと呼ばれる祭祀用の小屋の中となる。日常は人の出入りが少ないので、ここで道具類を動かすとほこりが舞い上がり、鼻の粘膜が刺激され、まさにくしゃみが出そうになる。その場合は息を止めてこらえる。それで耐えられないようなら鼻と口を手で押さえ、急いでその場を離れる。これが私の緊急時対応マニュアルである。

「あくび」（ムラルワヴウ）もまた、場合によって意外な意味をもつ。卑南族のトゥマラマオ（シャーマン）が行うスミラップという治療儀礼を観察していたときのことである。トゥマラマオの R 氏が、腰痛を患う患者と向き合い、檳榔子を患者の身体に当てながら呪文を唱え続けていると、彼女は大きな音であくびを繰り返し始めた。呪文を朗々と唱えながら眠くなるものなのかと私は驚いた。あとで聞くと、それは不浄な物の存在を知らせているのだという。この場合は、患者の身体の中にイパリンすなわち邪術（黒呪術）によって送り込まれた物があり、間もなくそれが背中から取り出された。いわゆる心霊手術の類いといえれば分かりやす

いだろうか。なお、トゥマラマオにも流儀や個人差があり、これまで数名のトゥマラマオによる同じ儀礼を観察する限りでは、同様な場面であくびを発するのはR氏のみであった。

続いて、厳密には「音」とは呼べないだろうが、耳鳴りについてである。耳鳴りはプマ語でマルニナタリガ、直訳すると「耳の音」と呼ばれる。これに関しても個人差が大きい、多くの人が語るには、右耳はよいが、左耳の耳鳴りは凶事、とくに人の死の前兆だという。中には、右の耳鳴りは吉兆であり、イノシシが罾にかかっていることを告げていると語る人もいる。卑南族に限らないが、台湾原住民の間では、右を吉、左を凶とする観念があり、耳鳴りの解釈にもその原理が働いているものといえよう。なお、解釈の個人差については、余談となるが夢見や鳥占も同様である。夢や鳥の鳴き方もなんらかの予兆とされることが多いが、自分の見た夢や鳥の鳴き方そして耳鳴りの記憶と、その後生じた事実とを結びつけながら、各自の予兆がカスタマイズされていくのである。

人間が生理現象として発するもう一つの音がある。それは、今回の特集のタイトルにある「匂い」にもかかわるもの。そう、放屁（ヴァワン）である。これは予兆でもなければ、呪術宗教的な意味でのパリシ（禁忌）でもない。しかし、時と場合によっては厳禁とされ、かつては、「人を侮辱している」という責めのもと、酒を提供して賠償させられることもあったという。

他にも、しゃっくり・げっぷ・いびきにも何らかの意味付けがあったかも知れない。それを確かめてみたいのだが、この原稿は締切り間近。くしゃみをしたので提出を延ばしたい。そんな言い訳は許されまい。この辺で筆を置くことにしよう。

台湾における「日本」の過去と現在

——糖業移民村を視座として

■「著」野口英佑 日本統治時代を経験した台湾の人々、そして現代台湾社会において「日本」はどのように位置付けられ、どのような意味を有しているのか。かつて糖業移民村であった龍田村の神社の再建を通して見えてくる、重層的な台湾社会の相貌。 ●2,970円

コレクション・台湾のモダンイズム 第1期 全20巻

■「監修」和田博文／河野龍也／吳佩珍／畠田哲／横路啓子／和田桂子 日台双方の膨大な一次資料から重要文献を厳選。モダンイズム資料の決定版。第一回・全4巻Ⅱ①台湾総督府の植民地統治（吳観人編）②日本・南支・南洋への航路（和田博文編）③台湾縦貫鉄道と交通網（蔡龍保編）④モダン都市景観（李文茹編） ●各19,800円

記号化される日本

——台湾における哈日現象の系譜と現在——

■「著」張瑋容 台湾における「日本オタク」を理論的に分析し、インタビュやフィールドワークと理論的分析を重ねながら、その多様な対日感情構造を解説。「哈日現象の最中に中学生になった」社会学者による、台湾における、日本の記号学的分析。 ●8,800円

近代台湾都市案内集成

■「監修・解説」栗原純／鍾淑敏……………全20巻 ●揃363,000円
様々な視点で台湾を紹介した一八九七年～一九四二年の文献を収録。
●第一回配本…『台湾鉄道旅行案内』シリーズ 全6巻・揃 90,200円
●第二回配本…台湾全般の案内記 全6巻・揃 118,800円
●第三回配本…台湾各地域・都市の案内記 全8巻・揃 154,000円

ゆまに書房

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6

TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493

<http://www.yumani.co.jp/>

※税込・パンフレット進呈

甘酸っぱい青春の歌～台湾高校創作卒業ソングの世界

山崎直也（帝京大学）

「NO MUSIC, NO LIFE.」とは、あまりにも有名なタワーレコードのキャッチコピーだが、その実、人生において音楽を必要とする度合いには、大きな個人差がある。ある人にとっては、まさにこの言葉通り、水や空気のように必要なもので、これらの人々は、「NO MUSIC, NO LIFE.」のポスターにも登場したあいみょんの「君はロックを聴かない」の歌詞のように、「こんな歌であんな歌で恋を乗り越えて」生きていくのだろう。他方で、音楽への関心がごく薄い人もいる。筆者の大学時代の数少ない友人のNは、およそイヤホンを耳にしている姿を見たことがないという人間で、音楽の趣味について語ることは皆無だったから、その彼がある日、「初めてCDを買った」と言って、カロゴンズの「カロゴンズのテーマ」（1998年）を興奮気味に差し出してきた時には心底驚いた。シノラーファッションと呼ばれるド派手な立ちで一世を風靡した篠原ともえと現在は俳優として活躍するユースケ・サンタマリアがトヨタローラのCMのために組んだユニットで、悪い曲ではないが、完全に物心ついた大学院生が衝動に駆られて思わずCDを手取る楽曲とは思われなかったからだ。前置きが長くなった。本題に入ろう。

このNほどではないが、筆者も音楽への関心は薄い方で、音楽サブスクに契約しているものの最近の流行にはまったくついていけない。それでも、学生時代には、資料収集で台湾に行く度に、フォトブックやら何やらおまけがたくさんついた華語ポップスのCDを何枚も買った。筆者が初めて台湾に行ったのは1996年のことで、当時は滾石唱片（Rock Records）が一騎当千の勢い。看板アーティストの蘇慧倫（Tarcy Su）が「Lemon Tree」「鴨子」「傻瓜」と、大ヒットアルバムを連発していた。リアルタイムでハマった彼女の楽曲は「青春の一頁」と言えば面はゆいが、今でも思い出して聴くことがある…と言うか、この原稿を書きながらまさに聴いている。2000年の周杰倫（Jay Chou）デビューの衝撃を目の当たりにできたのも我々世代の幸運で、「その衝撃はちょうど、日本における宇多田ヒカルの登場に匹敵する」などと言って若い世代に煙たがられることもできる。2000年の『Jay』以来、周杰倫がほぼ年1作のペースでリリースする新譜を欠かさずCDで買い続けていたのは『11月の蕭邦』（2005年）か『依然范特西』（2006年）あたりまでで、ここから、筆者が台湾の華語ポップスを熱心に追いかけていたのは、1990年代半ばから2000年代半ばの約10年間であったことがわかる。

その後、筆者と華語ポップスの距離感は、蘇慧倫、周杰倫、梁静茹、孫燕姿、伍佰 & China Blue、五月天と、その10年間で耳に馴染んだ楽曲を時折思い出して聴く程度になったが、そんな筆者が40代も終わりに差し掛かって、台湾の若い人が創った楽曲を集中的に聴くことになったのは、所属するSNET台湾がYouTubeチャンネルのコンテンツとして、「台湾高校創作卒業ソング」を展開したためである。台湾の高校では、2010年代あたりから、卒業を控えた生徒がオリジナルの楽曲のミュージックビデオを制作することが一種の学校文化として定着し、全国規模のコンテストも開催されてプロの歌手も輩出している。SNET台湾では、国立新竹女子高級中学、国立台南第一高級中学、国立台湾師範大学附属高級中学、高雄市立高雄高級中学、国立彰化女子高級中学の5校の作品を取り上げて倉本知明さんの巧みな日本語訳詞を字幕にしてYouTubeで公開した。曲調は学校により様々だが、日本のいわゆる「卒業ソング」とは異なり、明るく爽やかな楽曲が多い。歌唱と演奏、映像制作の水準も学校により異なるが、総じてレベルが高く、いずれも愛すべき作品となっている。歌詞の内容も興味深く、各学校の卒業ソングには、その学校の“collective memory”が登場する。例えば、新竹女子高校の「美しき日々」

のMVに「放課後4人で一緒に“多謝”に食べに行こう」というメモ書きが出て来るが、この「多謝」は学校の近くにあるかき氷屋さんのことで、生徒にはおなじみの「あの店」なのだろう。彰化女子高校の「あなたがいれば怖くない」の「チョコレート鶏」はニワトリではなく、学校の中庭にある茶褐色の鳳凰像だが、生徒にはこの愛称で親しまれている。2024年5月に調査で同校を訪れた際、実際にこの像を見る機会があり、「ホントにチョコレートだ」と感動した。歌詞には各学校の特色とともに、学校を超えて共通する台湾の高校の特徴が表れてもいる。筆者は教育を専門とするため、講義で学生にこの動画を見せるが、「教官室から放送です」というアナウンスや「カーキ色」の制服、台湾で人気の部活カラーガード隊が巧みに操るライフルを模した手具、「多元入学」の大学入試でボランティアに駆け回る様子など、リアルな台湾の高校の日常を垣間見て、日本とのちがいに驚くようだ。日本で卒業式の花と言えば桜だが、台湾では鳳凰木で、この鳳凰木も卒業ソングに頻出する。

卒業ソングに共通するテーマは「別れ」。高校生と言え自分の娘たちとほぼ同世代であり、私の高校時代は歌のようにキラキラと眩いものではなかったが、それでも台湾の若者が創り出す甘酸っぱい青春の歌に胸が熱くなった。まさに「こんな歌であんな歌でまた胸が痛い」というやつ。皆さんもYouTubeで「SNET 台湾高校卒業ソング」を検索し、再生リストからお気に入り一曲を見つけて欲しい。



チョコレート鶏（筆者撮影）

「アービンガー」の島

下野寿子（北九州市立大学）

「台湾の音」と聞いて思い浮かぶのは、「アービンガー」という言葉の響きである。大陸ではこの単語を聞いた覚えがない。

東日本大震災から間もない2011年3月、女性4人で初めての金門旅行に出かけた。台中出身のFさん以外は日本人だ。朝の清泉崗空港の出発ロビーには大きなリュックを担いだ迷彩服の若者がたくさんいて、スーツケースを転がす私たちは場違いな存在に思えた。

Fさんが電話で予約してくれた銃楼民宿は、得月楼や金水国民小学に近い伝統家屋のひとつである。上階の壁には、敵を迎え撃つため屋外に向けて銃口を構える場所だったという「槍眼」を漆喰で塗り固めた跡があった。壁際に置かれた鉄の塊には、煙草の灰が付いていた。パソコンはあると言われたが、モニターがなかった。だから電話予約しか受けつけなかったのかもしれない。

宿の主人の案内で、昼食は隣の金水食堂でとった。二階のテラス席で寒風の中、牡蠣と海苔の湯麺、蚵仔煎、五目そばに似た湯麺を食べた。大きな深皿にたっぷり盛られた熱々の料理は、シンプルな味つけて美味しかった。

宿の主人が手配してくれた女性のタクシー運転手は中国語を話したが、Fさんと話す時は台湾語になることもあった。運転手の話に繰り返し出てきたのが「アービンガー」である。間延びした響きを持つ単語が中国語なのか台湾語なのかわからぬまま、会話の文脈で意味を理解した。文学者のFさんは、軍事関係の説明に苦戦しながらも日本語に逐次通訳をしてくれた。運転手が「あれで島への上陸を防いだ」と指さした先を見ると、畑の中に電柱より低い細長い杭が間隔を空けて数本立っており、杭の先には上向き或いは横向きに長い釘のようなものが付いていた。人民解放軍の空挺部隊を撃退するための杭らしい。降車後、Fさんに「アービンガーは兵士のことよね。なぜアービンガーと言うの」と舌足らずの質問をしてしまった。Fさんは頷きながらも説明に困ったようだった。アービンガーを阿兵哥と表記することは、帰国後に読んだ台湾の小説で知った。

旅の二日目は開放された軍事施設を集中的に回ったせいか、どこに行ってもアービンガーを見かけた。大陸出身のアービンガーが大勢眠る大武山公墓では、若い後輩アービンガーが忠烈祠周辺の清掃に励んでいた。Fさんは「徴兵された若者にとって金門が一番行きたくない配属先だったけど、今は昔より待遇がよくなりました」と言った。

運転手に食事処を尋ねると、金門には牛肉と海鮮しかないと言い、金城でお勧めの食堂に連れて行ってくれた。夕食を終えて宿に戻る途中、運転手が「島で一軒しかない」と言ったセブンイレブンに寄ると、牛乳を除き、商品棚はほとんど空っぽだった。本当に「これしか」なく、「ここしか」なかったのかは不明であるが、私たちは金門のないない尽くしを旅の非日常として楽しんだ。ただ、夜の寒さだけは別だった。

民宿には薄い掛布団以外、暖をとる手段がなかった。宿の主人に毛布を頼むと、58度の高粱酒を一瓶持って来て、「毛布はない」と言い残し、帰って行った。皆で少し試飲したものの、結局寒さに震えながら眠った。二晩の体験で懲りた私たちは、金門へ配属された阿兵哥の苦労を欠片ほどでも理解できただろうか。

金門には8年で4回訪れた。その間、開放された軍事施設は観光地として整備が進み、軍事施設以外の島の魅力も再発見された。飲食店や観光客が増え、伝統家屋は洒落た民宿に変貌した。銃楼民宿は中台合作ドラマ「恋夏」の舞台になり、ネットで予約できるようになった。私

の最後の訪問は2018年6月で、映画「軍中樂園」の舞台となった陽翟老街を訪ねた。案内してくれた初老の運転手は、軍用車の修理工場跡や将校が出入していたという商店にも連れて行ってくれたが、「軍中樂園」の撮影から外れた場所は荒廃していて、阿兵哥の生活の匂いは感じられなかった。

クサイ・アブナイ

八尾祥平（ノートルダム清心女子大学）

まず、とにかく強烈に臭かった。列車を降りて、すぐだったのか、改札口を出たあたりからだったのかは思い出せないものの、とてつもなく臭かったことはよく覚えている。なんでこんなに臭いのか。どこかでゴミがぶちまけられているのか。いくらなんでもこれはヒドい。

駅を出て、ニオイのするところを探す。まだ、戒厳令の時代、東山彰良の小説にもある通り、台湾の道はとてつもなく汚く、弁当の食べかすであろう鳥の骨や排骨、ビンロウを吐いたもの、犬のフン（今思うと、人のモノもあったのではと思うことがある）、爆竹の残りかすなど、宇宙のありとあらゆるものが散乱していて、ぐちゃぐちゃな色をしていた。そんなところで、できるだけ余計なモノを踏まないように「安全地帯」を島伝いにピョンピョン飛び跳ねながら、このニオイのもとを必死に探していった。なお、「安全地帯」は全然ないことも少なからずあった。

気が狂いそうなくらいクサイ、そのニオイの原因となっている屋台を見つけ、「クサーイ、今すぐやめろー！」と日本語で叫んだ。言葉が通じるとか、通じないとか、そういうことを考えることを考える余裕はなく、また、そんな聡明さなど私にはもともとない。屋台のおじさんは「そんなにクサイというなら、これを食べてから文句言え！」と日本語で怒鳴り返してきて、私にそれを一皿出してきた。食べたって、ニオイが消えるわけなどない。だが、不思議なことに、それを一口食べると立ちどころにニオイが消えた。正確に言えば、ニオイは消えないのだが、そんなものが気にならなくなるくらいそれは美味しかった。

後から追いついた母が、自分の息子が「無銭飲食」をしているのを見つけ、あわてて、おじさんに代金を払おうとしたのだが、おじさんはおじさんのおごりにしてくれた。母は「これが台湾人の人情」と教えてくれた。そのころの私は「それはステレオタイプなものの見方に過ぎない」とか研究者がいいそうなコトバをもたないくらい幼く、心の中に母のいう「台湾」が埋め込まれていった。あと、母はこの食べ物が「臭豆腐」だということも教えてくれた。後日、テレビでやっていたカンフー映画に臭豆腐屋に身をやつした主人公が、地元のチンピラから「臭い」と難癖をつけられるものの、カンフーでやっつけるという場面をみて、「こんな旨いものに文句をつける方が間違っている」と、自分自身も文句を言っていたことは棚に上げて胸がスカッとしたのを覚えている。

当時、小学生にもならない私でも日本でやったらすごい怒られるけど、台湾では大丈夫と理解しているものがいくつかあった。その代表格が爆竹である。初めてみたのは親類の結婚式のときで、マシンガンの弾のようにぐるぐる巻きになっていた長い爆竹をひろげていき、マンションの上の方からぶら下げて、それを下から火をつけて、パンパンパンパンやっている。火事になったらどうするんだろうとか、そういうことを心配するよりも、とにかく面白いことに心を奪われ、母からは大きな音をだして魔除けにするからお祝いでは必ずやるような話を聞いて

た。同じように結婚式では麻雀でジャラジャラやると魔除けになるから、全然関係ない、ただ、麻雀が好きな人もきているけど、これはお祝いだからいいという話も聞かされ、そんな自由というか、いいかげんというか、ゆるい台湾の空気にどっぷりとつかって、私の心の中に台湾が育っていったのだと思う。

民主化後の台湾は、絶対に実現不可能だという私の予想を裏切って瞬く間に街全体が綺麗になっていき、高度経済成長によって臭豆腐屋が屋台ではなく、ビルのテナントに入るようになって、この店が撤退した後にニオイで他のひとははいらないのではと余計な心配もした。一方で、元旦に台北 101 で花火をするのはさすが台湾だと思うものの、都会では昔のように好き放題に爆竹はできなくなりつつある。時代の変化はとても早い。私の心の中にしかない台湾はどんどん増えていく。

時代や社会の変化にいいもわるいもない。ただ、あの臭豆腐の強烈なニオイとともに、私の記憶にこびりついている音がある。それは、日本教育を受け、社会で働く経験をもつ世代の、あの臭豆腐屋のおじさんのような世代のおじさんたちが語った「立派な日本人になろうと懸命に努力しても、結局は進学や就業で日本人と同等には扱ってはもらえず、戦後の国民党の時代もあり変化がないどころか悪くなったと感じる」という台湾人に生まれた悲哀について語る〈声〉である。おおっぴらに日本語を話してはいけなかった時代に、私が日本語しかわからないせいで仕方なく日本語で話してくれたおじさんたちの〈声〉が聞こえなくなって久しい。クサイ・アブナイと思っていたのに、それがなくなると寂しいと思う、身勝手なものねだりばかり私はしている。あのおじさんたちの〈声〉の記憶も、同じようなものねだりなのか。聡明さをほんのひとかけらも身につけることができなかった私にはわからない。

WEB 東方

東方書店のWEBマガジン
https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho
中国関係の書評やコラム、連載など読み応えたっぷり！
輸入書・国内書の図書情報や催事情報も充実しています。



新版 すぐ使える！
トラベル台湾語
近藤綾著／四六判200頁／税込2420円 978-4-497-22502-3
前半に、発音・文法の基礎、あいさつ・数の数え方などの基本表現をコンパクトにまとめる。本文会話は全33課で「交通・道順」「食べる」「トラベル」「出張」などのテーマごとに関連表現を解説。旅に役立つコラムも満載！ 音声ダウンロード方式。

第2版 東方台湾語辞典
村上嘉英編著／四六判572頁／税込8800円 978-4-497-22411-8
台湾教育部による台湾語常用語辞典オンライン版、国立成功大学台湾語検定試験センター認証の難易度明示台湾語単語集（試用本）ほか近年出版された台湾語（閩南語）の辞典、教科書、学習書などを参照の上、2007年初版の語彙を増補・削減。

東方書店

〈中国・本の情報館〉 <https://www.toho-shoten.co.jp/> *価格10%税込

〒101-0051東京都千代田区神田神保町 1-3 / ☎ 03-3937-0300 / tokyo@toho-shoten.co.jp



バイクの群れのサウンド／スメルスケープ

三文字昌也（東京大学・合同会社流動商店）

初めて台湾を訪れてから、留学で台南に滞在していた期間にかけて、私は台湾で出会った悪友によく台南や高雄の市内をあちこち連れ回されていた。熱炒から夜市、ありとあらゆる場所を案内してくれた彼らは、いつも決まってバイクの後ろに私を乗せて、自由自在に街の中を駆け回る。大量のバイクの群れの中で1台のバイクに跨るたびに、一匹の小さな魚が仲間と力を合わせて巨大な魚の形の群れを作り上げる「スイミー」という物語を思い出す。巨群の一員となりながら、街の中の色々な風景を走馬灯のように見せてくれるバイクという乗り物に、私は魅了されたのだった（そして私も免許を取って、その一員になった）。

私自身、日本でも日常的にバイクに乗るが、日本には台湾のような「バイクの群れ」がない。ゆえに「台湾の音、台湾の匂い」というお題をいただいて私がまず思い出したのは、バイクのエンジン音が大量に重なり、立体的に包み込まれる「群れ」のサウンドスケープと、その群れの中に溺み続ける強烈な排気ガスの匂いだった。この音と匂いは、特に、高雄駅すぐ隣の中博高架橋（今は消えてしまったが……）から降りる際の信号待ちの夕暮れの光景とセットで脳裏に焼き付いている。詰まるところ私はバイクの群れに魅了され、それが台湾の音と匂いとして記憶に刻まれているのである。

ところで最近の台湾のバイクの群れを観察していると、近年は車体に大きくロゴが入ったシェア型バイクも増えていることに気づく。シェアサイクルのYouBikeは有名だが、特に都市内シェア型電動バイクのサービスであるWeMoやiRent、GoShareというサービスは革新的だ。決まった返却ステーションを持たず、街の中の合法的な駐車スペースならどこでも返却できるというシステムは、日本の道路交通法では実現が不可能なものだと言える（もちろん、台湾でも一部都市部限定であるが）。同じ仕組みで2010年台からシェアサイクルを実現していた中国のMobikeは、放置自転車問題が社会問題化してしまったが、台湾におけるシェア電動バイクは比較的うまく運用されていると言えるだろう。私も渡台するたびによく乗るのだが、目的地に着いた時にその場所でそのまま返却できるシェア電動バイクというのは、利便性が格段に良い。こうした台湾の都市空間の利用は世界的にみても非常に先進的だと言えるのではないかな。日本の都市デザインを考える上でも、学ぶべきことは多い。

しかしシェア電動バイクの便利さに感動する一方で、一つ寂しいことがある。「音と匂い」の欠如だ。これらのサービスは電動バイクであるが故に、実は「台湾の音と台湾の匂い」がないのである。先に言っておくと、電動バイクという乗り物は非常によくできていて、ものすごく快適だ。静かで振動もなく、何より排気ガスの匂いがしないことは大なるメリットである。Gogoroに代表される台湾製電動バイクはデザインも性能も非常に素晴らしい。巨群になって街を駆け巡るという体験は電動バイクでももちろんそのままだ。結局は、私が旧来のガソリンバイクの音と匂いにただのノスタルジーとセンチメントを感じているだけなのかもしれない。しかし台湾のバイクの群れの中に、おそらくガソリンバイクはしばらく居続ける。多分、この群れの全てが電動バイクに置き換わるまでにはまだまだ長い時間がかかるだろう。それまでに、360度立体音響で鳴り響くエンジン音を鼓膜に焼き付け、ガソリンエンジンの排気を胸いっぱい吸い込んでおきたい。

カラオケボックスで歌った日本語

邱政荊（東京大学・院生）

私の家族に日本と縁のある人はほとんどいない。しかし、中学のときから日本のサブカルチャーが好きで、それを通じて日本語を勉強し始めた。思えば、確かに「哈日」と呼ばれる世代的風潮に影響されていたが、そのきっかけは間違いなく「歌」である。小学校の放課後、帰りで買ったドリンクを片手に「カードキャプターさくら」「デジモンアドベンチャー」など、キャッチーな主題歌のあるアニメを楽しみに見ていた記憶は今も鮮明だ。2000年代初頭のことである。当時、テレビで放映された日本のアニメは中国語吹き替えが主流だったが、主題歌だけは、日本語のままだった。それが日本語とのファーストコンタクトかもしれない。

2000年代後半に台北の公立高校に進学した。ちょうど、日本の動画配信サービス「ニコニコ動画」の全盛期だった。「ニコニコ動画」では、「音MAD」などのリリックビデオの創作文化が盛んだった。また、「弹幕」と呼ばれるコメント機能のおかげで、簡単に歌詞を表示できるようになっていた。歌は「聞くもの」を超えて、映像とともに鑑賞し、一緒に歌うものとなった。このような文化の影響もあり、私は仲間たちと日本語カラオケに通うことになる。

大竹昭子（1997）によれば、1990年代の東アジアに展開された「カラオケブーム」は、「まず〔日本から〕台湾に渡り、ここを拠点にして東アジア地域に浸透した」そうだ。大竹が記録したように、台湾で「卡拉OK^{カラオケ}」と言えば、主に若年層が通うKTVとも呼ばれるカラオケボックスと、中高年層が多いステージ形式のものがあつた。私が通っていた日本語カラオケは、前者に属する。

その店は、チェーン店のような大きな看板もなく、台北の古いオフィスビルの二階にあつた。住宅と見間違えるような風貌だった。店主が一人で店を切り盛りしており、飲食物の持ち込みは自由だった。店内のボックスは簡素なデザインで、日本のDAMかJOYSOUNDのカラオケ機器が備えられていた。台湾では珍しかったその機器を目当てに、私たちのような人間が続々と訪れていた。曲リストの更新は日本よりやや遅いが、それでも十分だった。私たちは、配信の有無を事前に確認し、各々家で準備してきた日本語の曲をそこで肅々と歌っていた。

佐藤卓己（1992）や夏鑄九（1992）によれば、現代カラオケは「密室」の中でモニターを見つめて歌う特殊な実践であるようだ。モニターをのぞきながら歌うスタイルは、ステージ形式のカラオケとは大きく異なり、パフォーマーと観客の関係を前提としない。参加者が同じ側に立ち、歌を共有する自閉的な空間だ。佐藤は「自分が傷つくことも他人を傷つけることも大嫌いな心優しき」「オタク」が集う場として、夏は「生活の中で互いに向き合えない小市民」がそのやるせなさを発散する「儀式」として現代カラオケを定義したが、多分、私たちにも当てはまるだろう。しかし、外国語で歌おうとしていた私たちにとって、そんな適度に無関心な空間こそ、まさに必要だった。発音が下手でも、たまに読み方を忘れても、音程を外しても、それほど気にならない。過剰に踏み込まない。ただ、同じ時間を過ごす。その中で、私たちはそれぞれ日本語との向き合い方を探った。

大学に入ると、「日本語カラオケ」をボックスの外で再現する人たちとも出会った。大学のサークルが空き教室でカラオケイベントを開催したり、別のサークルがいつそ大学のホールを貸し切り、参加者自作のミュージックビデオを放映しながら数十人で歌う「歌謡祭」なるイベントを開いたりしていた。どれもモニターを見て歌うスタイルだが、「密室」の空間が教室からホールへと広がり、その境界はあいまいになった。さまざまな場所で、私たちは歌ったのだ。

その後、私は日本に留学し、植民地期の台湾文学を勉強するようになったが、この経験をどのように総括すればいいのか、まだよくわからない。ただ、あのとき聞きたいろんな歌声は、間違いなく私の現在に繋がる、懐かしい「台湾の音」だった。

参考文献

夏鑄九「休閒的政治經濟學—對台灣的 KTV 之初步分析」（『戶外遊憩研究』、1992 年 5 月）
佐藤卓己「カラオケボックスのメディア社会史」（『ポップ・コミュニケーション全書』、PARCO 出版局、1992 年）
大竹昭子『カラオケ、海を渡る』（筑摩書房、1997 年）

「エリーゼのために」が聞こえる島

張彩薇（京都大学・院生）

「エリーゼのために」を奏でる電子音が聞こえる。しかし、ここにはゴミ袋を手にぶら下げ、道端で自然と列をなすいつもの人びとの姿はみられない。なぜなら、ここは台湾ではなく、そこから 100 キロあまり離れた、小さな島——与那国島——だからだ。

一昨年の夏、わたしは与那国で暮らす友人を訪ねた。1 泊の予定だった旅は、台風 6 号の影響で 11 日も伸びてしまった。しかしこの偶然のおかげで、比川のマチリに、わずかながらも参加することができた。そして、太鼓とドラのリズムに紛れて歩いているときに、懐かしいあの曲を流しながら町をまわる白いゴミ収集車と出会ったのだ。しばしば聞き取れない言葉が飛び交うこの島で、「近い」という感覚が、音を通してからだに沁みる瞬間だった。

「エリーゼのために」だけではない。八重山そばのお店では、ある女性が幼い頃に台湾の果物をよく食べていたと話してくれた。それは、屋嘉比収さんの研究で描かれたような、戦後の台湾と与那国島をつなぐ密貿易の世界の話だったのだろうか、と想像する。与那国民俗資料室の方からは、昔のテレビには、電波の干渉で台湾のチャンネルが映ることがよくあったとも聞いた。いまもなお、島の人びとがそれぞれ抱く「自立へのビジョン」のなかでは、台湾との交流への希望がしばしば語られる。2022 年に念願の設立を果たした与那国町立図書室には台湾関連の図書コーナーがあり、その蔵書は増え続けている。一方で、「台湾有事」といわれる緊張とも連動して、島の軍備増設や住民の疎開計画をめぐる葛藤が深まり、島の自治のあり方は大きく揺さぶられている。

このように、与那国島の人びとの生活意識のなかで、東京よりはるかに近い台湾の存在はさまざまな側面で無視できないものだった。ところが、台湾人であるわたしは、100 キロあまりしかないその島を、これまでほとんど意識したことはなかったし、する必要も感じてこなかったのだ。与那国島に滞在した間、わたしはほぼ毎日「日本最西端の碑」がある西崎へ通った。そこから年に数回、台湾島の島影が見えると知ったからだ。一度でも、自分が暮らしてきた場所を横から眺めてみたかった。けれども、残念ながらその姿をこの目で捉えることはできなかった。きっと、この小さな島からみると、台湾もまた、大きな島、さらには「大国」として映るのだろう。

交流のなかでこそ成り立つ与那国島の「自立」がやがて実現したならば、それが意味するのは、単に黒潮がもたらす隔たりを乗り越えたということにはとどまらないだろう。国境を越えたつながりは、一方で与那国島を「最西端」としか見なさない窮屈で不合理な国家の枠組みを突き破ることにもなるし、他方では「隣島」のことをちらりと考えることもしないある種の「大国意識」に変容をせまることにもなろう。与那国島の自立が持つ可能性を通じて、わたしは、台湾独立運動の先駆者、廖文毅を追うなかでも、そこで模索された自立のあり様を、より深い視点から捉え直すことができるようになった。そして、与那国島と並ぶもう一つの「交流の島」としての台湾の姿も、思い描くことができるようになった。



airiti Library 【台湾 E-journal コレクション】

台湾と中国の学術リソースをプラットフォーム統合した Airiti “アリティ” から台湾発行（一部マレーシア等アジア・世界各地含む）2,888 タイトルを精選した E-ジャーナル・コレクションです。SCIE、SSCI、A&HCI、EI、MEDLINE などの国際的に重要な検索データベースに含まれる、優れたジャーナルを主に収集しました。 <https://www.airitilibrary.com/>

大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)採択。ほとんどの大学様はコンソーシアム向け大幅割引価格が適用されます。

【NEW】円価格を設定。為替動向に関わらず一定価格となるため購入計画が容易となります。詳細お問い合わせください。

【収録分野・タイトル数】

人文学、社会科学、基礎応用科学、工学、生物農学、
医薬衛生学の 6 分野 2,888 タイトル（'24 年 4 月時点）

【言語別タイトル数：タイトルに複数言語を含むもの】

繁体字中国語：2,112 誌 / 英語：1,377 誌 /
簡体字中国語：51 誌 / 日本語：29 誌 / ほか



【主な導入機関】

台湾：600 機関以上（大学では市場占有率 100%。大学以外にも高校、病院、政府機関を含む）
中国大陸：300 機関以上（北京大学、清華大学、中国人民大学 等） / トライアル実施 2,500 機関
アメリカ：40 機関以上（ハーバード大学、スタンフォード大学、アメリカ議会図書館 等）
日本：'20 年実施の COVID-19 対応支援：無償アクセスでは 40 もの機関様にご利用いただきました



iRead eBooks 【台湾 E-book コレクション】

Airiti “アリティ” が誇る台湾・中国大陸・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア・シンガポールなどの 60,000 タイトル以上の eBook コレクションも利用可能です。一冊ずつの買い切り購入のほか割安となる全分野・カテゴリーごとの購読購入もお選びいただけます。ご機関様向けに公費お支払にも対応しています。 <https://www.airitibooks.com/>

文生書院

日本販売総代理店 〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7
電話 (03)3811-1683 Fax: (03)3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会（関東）

担当幹事：松岡格（獨協大学）

【第171回日本台湾学会定例研究会活動内容】

日時：2024年7月20日（土）14:00～16:00

場所：早稲田大学3号館606教室

報告者：林果顯（台湾国立政治大学台湾史研究所所長）

司会：洪郁如（一橋大学大学院社会学研究科教授）

題目：「台湾における高校歴史教育の改革とパブリック・ヒストリーの実践：選択科目教科書『探究と実作』を中心に」

主催：科学研究費補助金基盤研究（B）24K03162「台湾におけるパブリック・ヒストリーの実践と日台の歴史認識：越境する視座の構築」・早稲田大学台湾研究所・NPO法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク（SNET台湾）

共催：日本台湾学会定例研究会（関東）

その他：無料・申込不要

参加人数：40名

活動報告：

報告者から大学教員の立場から考えた高校教科書執筆の動機と制約、新たな課程綱要（108綱要）と高校教育改革、高校歴史教育に関する私見、教科書の内容紹介という4パートに分けての報告があった。

報告者は台湾社会の歴史に対する関心が高いとは言えず、多くの人が歴史を学ぶ意義を理解できていないことに気が付いた。そこで、『探究と実作』を執筆した際には、このような問題意識のもと、一般の人々が体系的に歴史知識を習得する義務教育の最終段階からパブリック・ヒストリーを考えさせることを狙った。

2019年から「12年国民基本教育課程綱要」（108綱要）が実施された。これにより、義務教育が9年から12年に変更され、内容もより実践的になった。生徒には分野横断的な知識を応用して問題を解決する能力が求められる。高校の歴史教科書も台湾史、中国史、世界史に分けられるようになった。また、歴史の選択科目『探究と実作』を学ぶ生徒の学習動機を高めるため、その学習成果を大学入試の選考内容に含めることになった。

民主化以降の台湾では、高校歴史教育において重要なのは生徒に脱構築の視点から目の前の知識がどのように形成されてきたかを理解させることであると考えられている。そのため、報告者が作成した『探究と実作』という教科書の内容に、生徒に歴史学の具体的なスキルを応用し、小論文を作成するスキルを身につけることを目標の一つとしている。（記録者：魏逸瑩）

【第172回日本台湾学会定例研究会活動内容】

日時：2024年11月16日（土）13:30～16:00

会場：東京大学本郷キャンパス国際学術総合研究棟内 文学部3番大教室

司会：和泉司（豊橋技術科学大学）

題目：ドキュメンタリー映画『中村地平』上映会

主催：東京台湾文学研究会

共催：日本台湾学会定例研究会（関東）

参加人数：30名

活動報告：

ドキュメンタリー映画『中村地平』は宮崎県出身の美術家である小松孝英監督による作品である。小松監督は2021年にドキュメンタリー映画「塩月桃雨」を発表しており、今回の上映作品が第二作目にあたる。

小松監督は宮崎県と台湾に縁のある人物のドキュメンタリー映画を創ることを目指しており、塩月桃雨と中村地平はいずれも宮崎県の出身で、後に日本統治時代の台湾に渡った人物であった。

中村地平（1908－1963）は作家として特に戦前に活躍した人物である。宮崎県の中学校を卒業後、旧制台北高校に進学したことで台湾との縁ができた。高校卒業後に東京帝大に進学し、井伏鱒二門下に弟子入りした。その際に太宰治と知り合い、やがて「北の太宰、南の地平」と呼ばれるほど、その才能を評価され、三度の芥川賞候補も経験した。戦後は故郷の宮崎県に戻り、県立図書館長や父親の後を継いで宮崎相互銀行の社長となるなど、実業の世界に身を置いた。そのような経緯のためか、現在では作家としての活動や作品については、台湾文学研究者以外にはあまり知られなくなっていた。小松監督は、このように忘れられつつある作家・中村地平と、宮崎県と台湾とに生きた人物と再評価する形で映像化したのである。

今回の『中村地平』には、歴史顧問として日本統治期台湾の日本語文学を研究している当会会員の河原功氏をはじめ、多くの台湾文学研究者が制作協力しており、映画にも登場している。その点からも、広くこの映画の意義を伝えるべく、今回の上映会を企画することにした。

上映会場として東京大学本郷地区キャンパスの教室をお借りしたのは、中村地平が東京帝大文学部美術科出身であったからである。このキャンパスには、中村地平が学生だった頃の校舎もまだ現役で使用されている。中村地平の作家人生の出発点となった東京大学の雰囲気を感じ取りつつ映画を鑑賞できたことは貴重な経験になった。

また、今回の上映会では、上映前に河原功氏による中村地平についての解説・紹介と、東京大学文学部准教授で、作家・佐藤春夫の研究を行っている河野龍也氏による佐藤春夫と中村地平との関わりについての講演も実施した。両氏の講演によって、今回の映画がより伝わりやすく、また深い理解につなげることができた。上映会にご参加いただいた方々のアンケートにも、両氏の講演をよろこぶ声が多数書かれていた。

先に述べたように、中村地平は現在では忘れられつつある作家となっているが、彼の作品には台湾生活の経験や台湾への愛着が強く活かされているものが数多い。台湾に関わる人達や台湾に親しみを感じる人達、台湾に興味を持つ人達に、もっと知られ、読まれてほしい作家でもある。今回の上映会が、そのきっかけとなってくれば、大変嬉しく思う。当会として、今後とも機会を得て、このような台湾の文学・文化の知見の普及に貢献できればと考えている。（記録者：和泉司）

【第173回日本台湾学会定例研究会活動内容】

日時：2024年11月17日（木）18:00～19:30

場所：東京大学東洋文化研究所3階大会議室/Zoom Meeting

報告者：Dr. Zsuzsa Anna FERENCZY（国立花蓮大学）

司会：松田康博（東京大学）

コメンテーター：遠藤乾（東京大学）

報告題目：“EU-Taiwan Cooperation in a New Reality: What Lies Ahead?（EU・台湾協力の新たな現実とその展望）”

主催：東京大学東洋文化研究所（「東文研セミナー」）

共催：日本台湾学会定例会（関東）

参加人数：40 名

活動報告：

本報告は、報告者の新刊書である *Partners in Peace: Why Europe and Taiwan Matter to Each Other* (Springer: 2024) の内容を主として行われた。EU 本部があるブリュッセルはその政治的言説の中で「パートナーとしての台湾」の位置を確保した。特にロシアのウクライナ侵略を中国が支持したことの意味を考えれば、この関係を地政学的な大局の中に位置づけることが重要である。台湾はまた、加盟国、特に中東欧諸国を巻き込み、EU をブロックとして巻き込むことで、ヨーロッパに対する自らの立場をより良いものにしようとしている。しかし、最終的には、台湾に友好的な欧州議会や、より自己主張の強い欧州委員会を超えて、加盟国がどの程度まで台湾に関与し、自己主張の強い中国を押し返そうとしているかが最も重要となる。これまでのところ、加盟国の政治的意志は中途半端なものにとどまっている。台湾の将来形成における EU の役割を高め、台湾の主体性を高めるような形で台湾との協力を拡大するにはどうすればよいのか、疑問が残る。台湾の地理戦略的な重要性は、EU 自身の利益にとっても重要なインド太平洋地域で高まる可能性が高い。これらを守るためには、欧州がより積極的に関与する必要がある。遠藤乾氏からのコメントとしては、EU が多くのアクターの集合体であることがネックとなっていて中国や台湾との関係において、言説における変化があっても行動における変化が伴にくいこと、特に指導的大国であるフランスやドイツの意向が大きく影響していることを指摘した。フロアやオンラインからの質問もあり、活発な議論が展開された。（記録者：松田康博）

【第 174 回日本台湾学会定例研究会活動内容】

日時：2025 年 3 月 27 日（木）15:00～17:00

会場：東京大学赤門総合研究棟センター会議室 549 室

司会：川上桃子（神奈川大学）

講演：呉介民（中央研究院社会学研究所）

コメント：伊藤亜聖（東京大学）、川上桃子

共催：東京大学社会科学研究所中国学イニシアティブ

参加人数：約 20 名

活動報告：

今回の研究会では、台湾の中国研究、中台関係論を長年にわたりリードしてきた政治社会学者の呉介民氏（中央研究院社会学研究所）を迎え、氏の四半世紀以上にわたる中国研究の集大成である『尋租中国：台商、廣東模式與全球資本主義』（國立臺灣大學出版中心、2019 年）の日本語版にあたる『同盟から決別へ グローバル資本主義下の台湾企業と中国』（日野みどり訳、三元社、2024 年）の刊行記念講演と討論、質疑応答を行った。

呉氏は、「中国との別れ？『尋租中国』の回顧と展望」と題して本書の概要を解説した。また、原著刊行の前後から米中経済対立が先鋭化し、中国の経済発展の前提条件が崩れたことを指摘し、これが中台経済関係に引き起こしつつある地殻変動について論じた。さらに、第二期トランプ政権の成立が中台関係に与える影響についても展望した。続いて、

伊藤亜聖氏、川上桃子氏がコメントを行った。伊藤氏は、本書が三層の視点をもつことを指摘したうえで本書の構成の魅力を指摘した。また、本書が膨大なフィールドワークの成果に支え

られていることを指摘し、こうした調査が困難になっている現状で中国研究者にはどのような研究手法が可能かという問いを提起した。

川上は、本書の貢献を整理したうえで、中国の国家を国際価値連鎖のアクターと捉えることの是非について問題提起を行った。最後にフロア討論を行った。参加者からは多くの質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われた。（記録：川上桃子）

定例研究会 関西西部会研究大会

担当幹事：五十嵐真子（日本台湾学会）

2024年12月15日（土）10時より、関西大学千里山キャンパスにて第22回関西西部会研究大会を開催した。今年も例年同様に対面とGoogle Meetを併用して実施した。会場での参加者は27名、オンラインでの参加者は15名だった。

今回は5つの個人報告に加えて、香港文学に関するシンポジウムも開催し、充実した内容となった。

プログラムは以下のとおりである（※はリモート参加者）：

第1報告 寺廟・宗族と地方政治—台湾桃園市新屋郷・観音郷の事例から

報告者：都通憲三朗（駒澤大学仏教経済研究所）

評論：小笠原欣幸（東京外国語大学名誉教授）※

第2報告 日本統治時代末期台湾における従軍看護助手の派遣

報告者：下田梓（名古屋大学大学院） 評論：宮崎聖子（福岡女子大学）※

第3報告 台湾作家朱西甯による香港の雑誌への寄稿—「アメリカ援助体制」との関わりについて

報告者：宋元祺（関西学院大学大学院） 評論：呉穎濤（大阪大学大学院）

第4報告 台湾アテモヤの対中輸出

— 依存、禁輸、禁輸解除をめぐる生産地の政治経済学

報告者：下野寿子（北九州市立大学） 評論：松本充豊（京都女子大学）

第5報告 地域の人神関係と信仰形態 —小琉球迎王の「攔轎申冤」における神との交流

報告者：黄信棋（筑波大学大学院） 評論者：三尾裕子（慶應義塾大学）※

シンポジウム「合わせ鏡としての香港—文学研究の視点から」

司会 澤井律之（京都光華女子大学元教授）

報告1 大東和重（関西学院大学）

「日本における香港文学研究——今後の可能性を探る」

報告2 李宗泰（クリス、LI, Kris Chung Tai）（大阪大学大学院）

「当事者以外による表象とその倫理の行方——梁莉姿『樹の憂鬱』を例として」

報告3 李凱琳（Lee Hoi Lam）（香港中文大学博士）

「リアリズムで香港社会を描く——王政恒『南歸貨車』と張婉雯『微塵記』」

第1報告は桃園市新屋郷と観音郷という広東系住民の多い地方を事例とし、1990年代から2000年代にかけての投票行動を分析するものである。具体的にはこれら地域の94・98・02・05年県議選と05年楊梅鎮長選のデータに基づき、伝統的な同族組織や祭祀圏が投票行動に影響を与えていると考察している。特に現在においても廟の運営をめぐる問題が地方政治では大きな影響を与えていることが指摘された。

この報告に対して、評論者の小笠原氏は祭祀圏と投票行動の関連性を数理データに基づいて証明している点を評価し、この手法が他の選挙にも応用して分析できるとしている。また、近年中国共産党が台湾の寺廟への関与をしている背景にはこうした点があるのではないかと指摘した。

第2報告は日本統治下台湾における女性動員の問題についてである。ここでは1942～45年の看護助手の派遣に注目し、彼女たちの実際の活動を新聞史料や回想録などから明らかにすることを目指している。当事者たちの発言をどう解釈するのかという問題もあるが、同時期の志願兵や徴兵推進のための宣伝という目的があったのではないかと考察している。

評論者の宮崎氏はこの分野は史料が限られている上に先行研究が少なく、本報告がその成果をまとめたものとして評価できるとしているが、本研究の意義や位置づけなどについて疑問を示した。参加者からは日本人看護師との関係や戦後も団体が存続したのか、などの質問があった。

第3報告は作家・朱西甯が1956年から1964年にかけて香港・友聯出版社の雑誌に発表した作品群に着目し、その特徴や社会的背景を検討している。この時期の作品は反共、女性の主体性、モダニズムといった特徴がみられる。ここには米援体制下の文化政策や香港の特異な文学空間の影響がみられると同時に、朱が独自の文学を形成した重要な時期でもあると考察した。

呉氏によるコメントは、作品の変化と冷戦下の文化政策とのつながり、朱が作品を掲載した『中国学生週報』文芸欄編集者との関係、他の作家との比較研究の可能性、中国国民党をどう表現しているのか、など多くの点を指摘するものであった。アメリカの援助下の香港を拠点に全世界の華僑を対象とした媒体に作品を発表することの意図や文化的意味は何なのか？という問いは、後半のシンポジウムの議論にも繋がるものであった。

第4報告は2021年9月に中国政府より台湾に告げられたアテモヤの禁輸措置に対する生産地からの対応を論じている。アテモヤは中国への輸出依存度が高く、生産地も台東県に集中しているため、台東県が主体となって交渉し、最終的に台東大学が新しい虫駆除技術を開発したことが解決につながったという過程を報告した。また、検疫の厳格化という科学的な要因が政治的な問題へとすりかえられたことも言及している。

評論者の松本氏は、本報告がエコノミック・ステイトクラフト（ES）論において地方レベルに焦点をあてていることや、生産者側の集中度という点に注目していることを評価しつつ、中国側の意図や禁輸措置の有効性とは何だったのかについて明確となっていないことを指摘した。ES論がマクロレベルの議論となる傾向があるが、ここでは台東県長という「代理人」に注目している点が特徴で、あらたな議論の可能性を開くものとしている。

第5報告は小琉球の王爺信仰に関する論考である。ここでは小琉球三隆宮にて三年に一度開催される迎王平安祭典でのフィールドワークから、神と住民との関係を論じている。報告者は特にこの祭典の特徴である「攔轎申冤」という行事に着目し、ここで実際に行われている神と住民とのやりとり一人々の抱える問題や悩みの相談、廟の運営など一から、王爺への信仰が住民の間に強く根付いていて、地域社会の精神的な安定をもたらしていることを指摘した。

評論者の三尾氏は1980年代に同じ地域を現地調査した経験から、現在とは大きく違う点を指摘した。本報告では男性シャーマン（タンキー）への相談が祭典にて行われているが、80年代では男性が漁のため不在であったため、「扛輦仔」という椅子を使った託宣が主流であったとした。その上で、個人への対応と共同体全体の神としての役割は矛盾しないのか、また「平和祭典」化という現象は王爺のイメージに影響を与えるのではないかと、等の指摘があった。

シンポジウムは、距離的には近いにも関わらず比較研究されてこなかった香港と台湾について、文学研究の視点から検討し、香港研究の意義とそれが台湾研究にもたらす意義について考えることを目的としている。

本シンポジウムは司会の澤井律之氏からの主旨説明の後、3名が報告し、最後にフロアを交えた総合討論を行った。

報告1では大東氏が香港の現状を紹介したのち、香港文学をめぐる研究史や先行研究の概観、香港の主要な作家、および「南来作家」と呼ばれる中国大陆から来た作家とその研究、近年の研究成果について紹介した。本シンポジウムの議論の背景を解説するものとなっている。

報告2の李宗泰氏は、2021年9月に台湾に移住し創作活動を行っている香港出身の作家・梁莉姿の『樹の憂鬱』を題材に、当事者でない者が政治運動を描くことの意味やその葛藤について考察した。香港にとどまる人々の代弁という意義と、それを利用しているという批判、台湾社会から視線など、香港出身者をとりまく現状が報告された。

報告3の李凱琳氏は、2つの作品、王政恒の『南歸貨車』と張婉雯の『微塵記』をとりあげ、香港文学におけるリアリズムについて分析する。『南歸貨車』は香港新界西部という社会的弱者の多い人々の居住する地域を扱い、『微塵記』は社会運動に距離を置こうとする保守的な親世代とのギャップを扱っており、これらは香港社会の現状を理解することでリアルなものとして捉えられるとした。

以上の報告を踏まえ、フロアも交えた形で質疑応答と討論が行われた。そこでは、香港人とは何をさすのか、香港人アイデンティティとは何か、香港のリアリズム表現の特徴について、といった質問があった。また、香港文学には英語で書かれた作品もあり、この分野についての言及が必要だという指摘もあった。台湾研究者にとっても香港に関心を持つことはプラスになることも多いはずで、今後もこうした場をとおして比較研究を進めていければと思う。

定例研究会 台北

担当理事：富田哲（台湾・淡江大学）

第93回台北定例研究会

日時：2025年3月15日（土）13:00～

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者1：湊照宏（立教大学経済学部）

テーマ：アメリカのMSA援助と台湾の化学肥料工業

報告者2：西村一之（日本女子大学人間社会学部）

テーマ：死者との向き合い方：東海岸アミ社会の墓・供養・祖霊

使用言語：日本語

参加者：9名

第94回台北定例研究会

日時：2025年3月29日（土）13:00～

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：中生勝美（桜美林大学リベラルアーツ学群）

テーマ：パイワン族の1930年代の映像資料

使用言語：中国語

参加者：14名

以上

王崧興『亀山島』と漢人社会研究

川瀬由高・稲澤努・長沼さやか・藤川美代子・呉松旆編訳
原石のような民族誌の古典を完訳。陳其南の特別寄稿や論
考・資料による多角的かつ今日的な再評価。 三七四〇円

中国民族誌学 100年の軌跡と展望

河合洋尚・奈良雅史・韓敏編 もはや「史料」となりつつ
ある膨大な中国研究・人類学の蓄積。ワールドワイドな視点
から整理・総覧。人類学と歴史学の交錯。 三九六〇円

冷戦アジアと華僑華人 陳來幸編

マイノリティだった時代、様々な繋がりをたぐり生きた
日々。聞き取りと史料から暮らしや社会活動のディテール
を掘り起こし、現代に至る人々の「根」を探る。 四四〇〇円

辺境からの中国 黄海島嶼漁民の民族誌

緒方宏海著 辺境の島だからこそ顕著になっている諸現
象を明らかにすることで、中国社会の実態とその未来が俯
瞰できる。第40回大平正芳記念賞・受賞。 五五〇〇円

土楼 円い空の下で暮らす福建客家の民族誌

小林宏至著 「宗族・客家が土楼を生み出した」という従
来の発想を転換し、タテモノこそが彼らを創り出してきた
のだとする、注目の斬新な論考。 五五〇〇円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端4-14-9
TEL: 03-3828-9249 FAX: 03-3828-9250

(価格は税込)
URL: <http://www.fukyo.co.jp>

学会運営関連報告

五十嵐隆幸（防衛研究所）

【第13期常任理事会第4回常任理事会議事録（抄）】

日時：2024年7月19日（金）13:30～16:30

場所：関西大学東京センター＋オンライン（Zoom）

出席（会場）：赤松美和子、明田川聡士、五十嵐隆幸、北波道子、洪郁如、菅野敦志、松金公正、松田康博、山崎直也
出席（オンライン）：清水麗、富田哲、大東和重
欠席：上水流久彦、宮岡真央子
主宰：北波道子（理事長）
書記：小野純子（オンライン／15：00 から参加、～15：00 五十嵐理事代理）

【報告】

1. 理事長・事務局

（1）北波理事

学術大会後、最初の常任理事会となる。大会実行委員長をはじめ大会にかかわった方にあらためて御礼を申し上げる。

（2）川上事務局担当理事〔代理：五十嵐理事〕

以下の通り会員情報について報告がなされた。

・総会員数445名（2024年7月16日現在）

〔内訳〕一般会員379名、学生会員49名、シニア会員17名

・事務局に保管中の学会報バックナンバーの処理について報告がなされた。

2. 各業務担当

（1）五十嵐総務担当理事

配布資料にもとづき、総務関連の報告がなされた。

（2）山崎会計財務担当理事

配布資料にもとづき、2024年5月24日以降の会計財務関連の報告がなされた。

（3）宮岡広報担当理事

配布資料にもとづき、広報関連の報告がなされた。

（4）赤松編集委員長

配布資料にもとづき、『日本台湾学会報』第26号の刊行状況が報告された。

（5）富田企画委員長

配布資料にもとづき、第26回学術大会に関する報告がなされた。

（6）菅野・洪国際交流担当理事

配布資料にもとづき、国際交流担当事業について報告がなされた。

（7）定例研究会〔統括：明田川理事〕

配布資料にもとづき、定例研究会について報告がなされた。

3. その他

日本台湾学会学術賞特別賞選考委員会について北波理事長、松田理事より現在の状況と今後の管理について報告がなされた。

【議題】

1. 第26回学術大会について（清水第26回学術大会実行委員長）

清水大会実行委員長より配布資料にもとづき、第26回学術大会の報告と審議が求められた。第26回学術大会の報告は、満場異議なく承認された。

2. 第26回学術大会決算報告（清水第26回学術大会実行委員長）

清水大会実行委員長より配布資料にもとづき、第26回学術大会決算案が示され、審議が求められた。第26回学術大会決算案は、満場異議なく承認された。

3. 第27回学術大会について（大東第27回学術大会実行委員長）

大東大会実行委員長より配布資料にもとづき、第27回学術大会についての審議が求められた。第27回学術大会案は、満場異議なく承認された。

4. 第27回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要領について（清水企画委員長）

富田理事より配布資料に基づき、第27回学術大会のスケジュールと募集要項、申込用紙などが示され、審議が求められた。審議の結果、募集要項の修正案が示され、修正案は満場異議なく承認された。

5. 『日本台湾学会報』第27号の投稿および原稿執筆要領等（赤松編集委員長）

赤松編集委員長より配布資料にもとづき、執筆要領が示され、審議が求められた。審議は満場異議なく承認された。

6. 次期以降の事務局運営（移転含む）について（五十嵐総務担当理事）

五十嵐理事より、次期以降の事務局運営について現状と問題、今後の提案とスケジュールが示され、審議が求められた。審議は提案通り満場異議なく承認された。

7. 会員の入退会について（五十嵐総務担当理事）

五十嵐理事より、会員の入退会について配布資料が示され、審議が求められた。新規の入会は満場異議なく承認された。

8. 次回常任理事会の日程について（五十嵐総務担当理事）

五十嵐理事より、次回常任理事会の日程が示され、審議が求められた。同日程は満場異議なく承認された。

【日本台湾学会第13期理事会第5回会議議事録（抄）】

日時：2024年12月21日（土）13:30～17:00

場所：関西大学東京センター＋オンライン（Zoom）

出席（会場）：五十嵐隆幸、北波道子、松金公正、山崎直也

出席（オンライン）赤松美和子、上水流久彦、洪郁如、清水麗、菅野敦志、富田哲、松田康博（15時から参加）、宮岡真央子、松本充豊（学会賞選考委員長）、大東和重（大会実行委員長／15時頃まで参加）

欠席：明田川聡士

主宰：北波道子（理事長）

書記：小野純子（オンライン／15時頃まで参加）15:00～五十嵐隆幸理事

【報告】

1. 理事長・事務局

(1) 北波理事長

(2) 川上事務局担当理事〔代理：五十嵐理事〕

以下の通り会員情報について報告がなされた。

○会員数（2024年12月15日現在）

- ・ 総会員数は 452 名（前回常任理事会からプラス 4 名）
- ・ 内訳：一般会員 379 名、学生会員 54 名、シニア会員 19 名

2. 各業務担当

(1) 五十嵐総務担当理事

配布資料にもとづき、総務関連の報告がなされた。

(2) 山崎会計財務担当理事

配布資料にもとづき、2024年7月20日以降の会計財務関連の報告がなされた。

(3) 宮岡広報担当理事

配布資料にもとづき、広報関連の報告がなされた。

(4) 赤松編集委員長

配布資料にもとづき、『日本台湾学会報』刊行状況と次号について報告がなされた。

(5) 清水企画委員長〔代理：富田理事〕

配布資料にもとづき、第27回学術大会に関する報告がなされた。

(6) 菅野・洪国際交流担当理事

配布資料にもとづき、国際交流担当事業について報告がなされた。

(7) 定例研究会（統括：明田川理事）〔代理：五十嵐理事〕

配布資料にもとづき、定例研究会について報告がなされた。

3. その他

- ・ 配付資料にもとづき、日本台湾学会賞への推薦依頼について松本選考委員長より報告がなされた。
- ・ 配付資料にもとづき、日本台湾学会学術賞について三澤選考委員長〔代理：北波理事長〕より報告がなされた。

【議題】

1. 第 27 回学術大会プログラム（清水企画委員長；代理富田理事）

富田理事より配布資料にもとづき以下、第 27 回学術大会プログラムの報告と審議が求められた。審議の結果、満場異議なく承認された。

2. 第 27 回学術大会会場校の準備状況および予算案（大東第 27 回学術大会実行委員長）

大東大会実行委員長より配布資料にもとづき第 27 回学術大会の運営状況と開催準備について審議が求められた。審議は提案通り、満場異議なく承認された。

3. 次期以降の事務局運営（移転含む）について（五十嵐総務担当理事）

五十嵐総務担当理事より配布資料にもとづき事務局移転の方針（移転または委託）について審議が求められた。審議は提案通り、満場異議なく承認された。

4. 事務局人件費について（五十嵐総務担当理事）

五十嵐総務担当理事より配布資料にもとづき事務局人件費について審議が求められた。審議は提案通り、満場異議なく承認された。

5. パートナー会員申請手続きに関する規定の整備（五十嵐総務担当理事）

五十嵐総務担当理事より配布資料に基づきパートナー会員申請手続きに関する規定について審議が求められた。審議は提案通り、満場異議なく承認された。

6. 会員の入退会（五十嵐総務担当理事）

五十嵐総務担当理事より配布資料に基づき会員の入退会について示され、審議が求められた。入会1件、退会1件は満場異議なく承認された。

7. 次回常任理事会の日程（五十嵐総務担当理事）

五十嵐総務担当理事より、次回常任理事会の日程調整について審議が求められた。審議は提案通り、満場異議なく承認された。

8. その他

北波理事長より「理事選挙における電子投票の導入について」について提案が示され、審議が求められた。審議結果は、第14期で検討するよう申し送られることが満場一致で承認された。

以上

***** 編集後記 *****

・本号では、特集「台湾の音、台湾の匂い」と題し、珠玉のエッセイ11本をお届けします。南管の音、台北の雨、原住民族の伝統音楽、くしゃみとあくび、高校卒業ソング、金門島、臭豆腐、バイクの騒音、カラオケ、与那国島…とキーワードだけあげても本当に様々なテーマのエッセイが集まったことがわかるでしょう。この特集を組んで良かった！と誇りに思える、編集者一押しの48号となりました。執筆者の皆様にはもう一度、心よりお礼申し上げます。

・次号49号（2025年10月発行予定）は、特集「日本台湾学会第27回学術大会を振り返って」をお届けします。第27回学術大会は、2025年5月24日・25日に関西学院大学にてハイブリッド形式で開催される予定です。大会運営、シンポジウム企画、分科会の報告にかかわる皆様、また何卒ご協力をよろしくお願いいたします。

・ニュースレターは会員による情報交換の場でもあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。特集テーマの案、エッセイ執筆に関心のある方は、担当の八木までご連絡ください。

（八木はるな）

日本台湾学会ニュースレター 第48号

発行：日本台湾学会（代表 北波道子）

発行年月：2025 年 4 月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2

アジア経済研究所気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒112-8551 東京都文京区春日1-13-27

中央大学理工学部 八木研究室気付

E-mail: harunayg@gmail.com